

史と詩の町から 犬山

令和2年9月号
通巻第58号

特集

犬山城天守の 魅力について 再考

発行者 犬山名所協会
所在地 犬山市犬山白山平2
尾関作十郎陶房氣付
編集・製作 犬山名所協会事務局

特集

犬山城天守の魅力について 再考してみる

犬山城マイスター！たかまる。（関隆二）

犬山城天守は国宝に指定されています。

同様に国宝天守は姫路城、松本城、彦根城、松江城であり、犬山城も含めて五城しかありません。

重要文化財に指定されている現存天守は七つ（弘前城、丸岡城、備中松山城、丸亀城、宇和島城、松山城、高知城）であり、国宝と合わせても現存天守は十二城だけです。

このような状況において犬山城が国宝天守であるという価値は変わりませんが、どこに魅力があるのでしょうか？

今回は犬山城天守の魅力について、筆者独自の視点で改めて考えてみたいたいと思います。

■ 天守とは何なのか？

犬山城天守の魅力を再考する前に、まず天守とは何なのかについておさらいしておく必要があります。

- ・典型的な望楼型天守であること
- ・そうでありながら、教科書的な構

それでは、あらためて犬山城天守の魅力を筆者独自の視点で考えてみると、以下のように見ることができます。

■ 犬山城天守の魅力とは？

お城に詳しい方であれば、パッと見たらすぐにわかるとは思いますが、それほど専門的でない方にはわかりにくいでしょう。

しかし、犬山城天守をご覧いただくと、まさしく教科書にあるような形になっているのがわかると思います。

織田信長によって安土城に天守が建てられたのが初めてと言われています（※）が、当初はすべて望楼型でした。（※近年の発掘調査などにより、安土城以前に天守があつた可能

造ではない部分があること

・シンボルとしての格式を重んじる様式であること

・世の中のポジションにあわせた天守であること

順番に見ていきますと、まず典型的な望楼型天守であることについて。

望楼型天守とは、一般的に2階建ての入母屋造りの上に望楼（物見櫓のようないわゆる天守）が乗ったような形の天守のことを指します。望楼型天守としては、姫路城、彦根城、丸岡城、高知城などがあります。

しかし、現存している天守で戦を経験しているのはほとんどありません。

つまり、江戸時代を通して戦の少ない時代にそびえ立っており、明治以降も奇跡的に解体されることなく残つたものが現存天守なのです。

それを理解したうえで、犬山城天守はどうのような存在だったのかを考えなければいけません。

教科書ではシンプルに書かれることがほとんどですが、これらの天守を見比べてみてもどこがこのようないわゆる天守の特徴かは一見してもわかりにくいと思います。

お城に詳しい方であれば、パッと見たらすぐにわかるとは思いますが、それほど専門的でない方にはわかりにくいでしょ。

しかし、犬山城天守をご覧いただくと、まさしく教科書にあるような形になっているのがわかると思います。

織田信長によつて安土城に天守が建てられたのが初めてと言われています（※）が、当初はすべて望楼型でした。（※近年の発掘調査などにより、安土城以前に天守があつた可能

性が出ています。定かにはなっていませんが、今後の動向に注目したいところです。)

その後、シンプルなつくりの層塔型天守が登場してからは層塔型天守も望楼型天守も存在していました。

このような状況も踏まえると、犬山城天守は初期望楼型を色濃く反映した形であると考えることができます。

典型的な望楼型の形をしているがゆえに、戦後に建てられた模擬天守などで犬山城をモデルにしたものがいくつも誕生しました。

真似されることは、人々が見てわかりやすい「Theお城」であり、他の地域の方が憧れる形でもあると言えるのではないでしょう。

二番目の、典型的な形でありながら教科書的な構造ではない部分があることについて。

例えば、狭間が見受けられないこと、付櫓が二つあること、地下二階建てであること、石垣が穴蔵構造であること、石落としがダミーであることなどが挙げられます。

なぜそのような形になつたのか、いつもそのような形になつたのかはつきりとしないところがありますが、いろいろな歴史を経て現在の形になつてい

ることは間違ひありません。当初は2階建ての天守であつて、その後の増築を繰り返して現在の形になつたことが調査によりわかつています。

また、明治に起つた濃尾地震によつて大きく損壊した部分があり、昭和の大修理によつて元の姿に戻されたことも歴史のひとつです。

このような歴史を踏まえながらも、教科書的ではない部分があることはミステリーであり、それがまた犬山城天守の魅力にもなつていると思うのです。

三つ目。シンボルとしての格式を重んじる様式であること。

言葉で表すのは難しいですが、天守最上階の外壁が真壁造であること、華頭窓がつけられること、廻縁・高欄がつけられていること、天守正面と北面の中央に唐破風がつけられていることなどが挙げられます。

真壁造とは柱や長押などがむき出しになつた壁のことで、通常では室内の壁が真壁造になつていますが犬山城天守の場合は最上階の外壁が真壁造になっています。

一般的には天守の外壁は大壁造りという柱なども漆喰で塗りこめられた壁になつています。その代表例は

姫路城や彦根城です。

大壁造りに比べて真壁造の方が建築様式として格式が高いとされています。社寺建築ではよく見かける様式ですが、天守で見られるのは丸岡城と犬山城の二城だけです。

初期の天守は真壁造が多かつたと推測されていますが、風雨にさらされてむき出しの柱や長押が朽ちやすくなつてしまふことや戦のときに火矢が飛んでくると燃えやすいというが理由で、すべてを漆喰で塗りこめてしまふ様式に変化していったと考へられています。

それでもなお、犬山城天守はあって真壁造にしているのは、ひとえに格式を高めるためだつたと思います。

四つ目の世の中のポジションに合わせた天守であることという点についてです。

よく犬山城は小さいと言われることがあります。たしかに天守のサイズは小さいかもしません。

しかし、何と比べて小さいと言っているのかが重要です。例えば名古屋城天守と比較しているのであれば天守自身のサイズは名古屋城天守に比べてたしかに小さいですが、尾張徳川家の居城であり、尾張藩62万石の城としての名古屋城天守は大きくて存在感があり、それにふさわしいでしよう。

現存天守で言えば姫路城天守が最大級ですが、姫路藩52万石としては莊厳なつくりの天守はそれに見合つたシンボルと言えるでしよう。

一方で、犬山城は江戸時代を通して成瀬家が城主を務めますが、尾張藩の付家老という役職のために大名にはつていませんでした。しかし、犬山城と3・6万石の領地を将軍より拝領していました。犬山藩として立藩したのは明治になつてからです

が、その規模からすると犬山城天守は小さいと言えるでしょうか？

私はその規模にあつた城郭のサイズだつたのではないかと想像しています。

ます。考えてみてください。犬山城がある「城山」に名古屋城のような大天守がたつていたとしたら。どれだけ不釣り合いでしょ。

このように考えると、犬山城の土地や役割を十分に理解したうえで、犬山城内で唯一現存している「天守」が大きいのか小さいのか、それともジャストサイズなのかを考えなければいけないでしょ。

城はその土地を治めるものの拠点となるところです。その土地その土地の交通、経済、産業、文化、その他があらゆるものを見合つたうえで、その場所に城を築くことを決めたわけです。それらを総合すると、犬山を統治する拠点としての犬山城はジャストサイズだつたろうと思うのです。

天守の高さや面積だけが城の魅力ではありません。大大名が築城したり居城としていたりすることだけが城の魅力ではありません。

城本来の魅力とは、その土地にとつてどのような存在だったのか？歴史的にどのような状況から城が生まれ、そして現在はどのような位置づけになつてているのか？それらのことすべてが城の魅力につながつているのだと私は考えます。

■ 犬山城天守は犬山のアイデンティティであり、日本のアイデンティティである

天守を見るとホツとする、落ち着くという方がよくみえます。天守も含めた城郭は日本独自の発展を遂げてきました。昔からあり、そして今もあるものとして当たり前のように捉えがちですが、ここに至るまでは様々な障壁がありました。それを乗り越えたからこそ今も存在しているわけです。

そしてお城とは、その地域の拠点であり、交通、経済、産業、技術、政治、文化など様々なものが凝縮されています。それらを総合すると、犬山を統治する拠点としての犬山城はジャストサイズだつたろうと思うのです。そして犬山城は犬山のアイデンティティであり、日本のアイデンティティでもあると思うのです。

なぜなら、日本のアイデンティティだからです。城めぐりをすると、日本人であることの誇りを感じずにはいられないのは、こうした思いが自然と湧き出てくるからでしょ。その魅力を一言では言い表せませんが、また見たくなると思わせるだけの魅力的なお城であることは間違いなさそうです。

